

## 100年の記憶 ウィルソンの見た鹿児島

植物担当 寺田 仁志

世界自然遺産の島・屋久島のウィルソン株をご存じでしょうか。

畳20枚分ほどの広さがある屋久杉の枯株で、株の中に入って下から見上げるとハート型の空間から樹齢数100年の数本のスギが見えます。

この枯株の発見は、東アジアの植物研究者として名高いハーバード大学のE. ウィルソンが、100年前の1914年に日本を訪れた際に最初に野生のスギを見たいと屋久島に憑かれるように向かったことが発端でした。



©President and Fellows of College.

Arnold Arboretum Archives.

当時枯株は苔むした岩のようで、枯株の大きさを表現しようと案内の人をその際に立たせて撮影しました。

それから100年、表面は裸出し、祠も建てられ、様々な歴史を経てきました。

ウィルソンは2回日本を訪れ、沖縄・小笠原から北海道・サハリンまで植物について調査し、約750枚の鮮明な写真と標本、記録を残しています。このうち鹿児島県関連では屋久島58枚、県本土（鹿児島市城山、桜島、霧島、蒲生など）62枚、計120枚で鹿児島はウィルソンにとって魅力的な地域であったことがわかります。

最初の日本調査は折しも桜島大正噴火の年で、火砕流によって影響のあった森や溶岩流出後2ヶ月たっても海岸から水蒸気が上がっている桜島の写真等もあります。

ウィルソンの写真は鮮明であるため、撮影

した場所を特定できるものもあり、現在と比較してみるとみると、その後起こった自然の歴史がわかってきます。

この写真は高千穂河原にある霧島神宮の鳥居のところにあったアカマツの写真です。アカマツは欧

米にはなく中国、朝鮮、ロシアと日本など東アジア特産の植物です。背景はマツやモミを含む落葉低木林やススキ草原のような火山活動によってできた植生です。風が強い山地部



©President and Fellows of College.

Arnold Arboretum Archives.

あるのに、中心の40年生ぐらいのアカマツだけが突出しており、ウィルソンには魅力的だったのででしょう。また、重いガラス乾版を積んだ人力車の轍がくっきりと残っていることから、数日前に火山灰が降ったことが理解されます。

現在はこの3本のアカマツは枯れて無くなり、背景は高い50年以上のアカマツ林になっています。この100年の間に御鉢の火山活動は穏やかになり、植生の遷移が進み、深い森になったと推察されます。

ウィルソンは「もし写真や標本で記録を残さなかったら、100年後にはその多くは完全に消えてなくなるだろう」と書いています。

この100年で自然は日本全国、否、世界中で大きく変化しています。100年前の景観を精密に記録したものはほとんどありません。ウィルソンが残した写真と記録は価値のあるものであると同時に、彼が残した言葉は、多様な資料を収集し、調査研究する博物館の価値、重要性を述べたものともいえます。

100年前に撮影した写真は地域の移り変わりを雄弁に語りかけてきます。